

詩の世界へようこそ—文学と日本語教育をつなぐミシガン日本語教師会ワークショップの実践報告—

「単語を三語、いや、一語でも知っていたら、詩が書けますよ」。これは Japanese Teachers Association of Michigan のワークショップで講師の先生が言われた言葉である。その後、参加者達は日本語教育の世界から文学の世界へと続く橋を自分の足で渡っていくことになる。始めは恐る恐る、最後はスキップしながら、時には肩を組んで。

このワークショップは Japan Foundation Los Angeles の助成の下、2019年11月にミシガン大学において”Exploring the Multifaceted Dimensions of Japanese Poetry as a Pedagogical Tool”と題して行われた。講師に文学の教授であると共に詩人、翻訳家でもある Western Michigan University の Jeffrey Angles (ジェフリー・アングルス) 教授と、Michigan State University の Catherine Ryu (柳キヤサリン) 教授をお迎えして行われた。日本の詩は俳句、百人一首、川柳、短歌、現代詩などジャンルも多岐に渡り、時代や国境を越えて詠まれているにも拘わらず、日本語教育の場で教材になることはまだそれほど多くない。実際、ワークショップの事前アンケートでは「初級にどうやって教えるのか」「詩を教えるためにはどんな文法が必要か」「たぶん私の学生はまだ詩を理解するレベルには達していないと思う」などの声が寄せられた。そこにあったのは「理解」「レベル」「文法」など、教授法に関わる単語であり、「文学の鑑賞」に関する懸念や質問は少なかった。

ワークショップは三部構成で行われた。まず、”Finding One’s Voice in Japanese: The Poetics of Living & Writing Between Languages”と題して、アングルス先生の基調講演があり、詩を翻訳すること、書くことについてご自身の経験も交えて語られた。うれしいことに、読売文学賞も受賞した著書『わたしの日付変更線』に所収された詩をいくつか朗読してくださった。特に『文法のいない朝』という詩は、午後のワークショップにも度々話題にのぼり、参加者全員が様々な点から話し合ったり、鑑賞したりすることができた。

次に、Eastern Michigan University の田伏素子教授のモデレーターのもと、ラウンドテーブルが行われた。田伏先生の明るく楽しい進行のおかげで、本当にこぢんまりと温かい座談会になり、参加者が緊張せずに意見や体験をシェアする場となった。ここではアングルス先生が「私の書齋から持ってきました」というミニライブラリーの中から高橋新吉、新国誠一、谷川俊太郎などの詩集が紹介され、実際に手に持って、フォントやイラストで視覚的に楽しむ詩を体験することができた。翻訳の場では斜体、フォント、字の大きさなどで翻訳できないものを表すこともあるという。また、この座談会では「Open up minds. 心を開く」ことの大切さを学んだ。詩の「解釈」には本当に多様な答が存在し、読み手がそれをどう表現するかは読み手自身に委ねられているのである。

最後に柳先生の詩の教授法についてのワークショップが行われた。本当に英語の Eye Opening という言葉がぴったりのワークショップで、お昼のお弁当を食べた直後でありながら、眠気に襲われる参加者は一人もいなかった。柳先生からは百人一首から震災の詩に至るまで、様々な詩にどうやってアプローチできるかを学んだ。例えば金子みすゞの「こだまでしょうか」を例にとり、動画を見て詩のイメー

ジについて話し合ったり、翻訳すると何が難しいかを議論したり、金子 みすゞの時代背景、人物像を読み解いたり、詩の一編にまつわる要素と解釈の多さに驚かされた。参加者からは「グーグル翻訳したらどうなる?」「誰が話してる?」「『こだま』って児玉さん?」「一人で話してる?二人で話してる?大人数で話してる?」など様々な疑問が浮上し、それを議論することで詩の深さ、解釈の多義性、多様性を学ぶことができた。柳先生の「詩は作者の手を離れたら、生き始めるんですよ」という言葉こそ、私達教師が教室で学習者達に伝えるべきことではないだろうか。

最後はグループになって詩を使った教材を作った。例えば、高校の先生からは俵万智の短歌「いつもより一分早く駅に着く一分君のことを考える」を使った教案や、初級の高校生でも形容詞を使って詩を創作できるような教案が発表された。小学校の先生は教科書にあるオノマトペがふんだんに織り込まれた詩を体で表現する教案を考えたり、大学の先生は最終ゴールとして Storyboardthat というサイトを使った表現にまで持っていくことをステップと共に提案したりした。このようにワークショップの最後は、様々なジャンルの詩の選択と解釈を経て初めて辿り着く学習者の表現方法が共有された。教案の発表の場には「理解」「文法」という語彙は全くなく、使われていたのは「解釈」「表現」「ゴール」という語彙である。

ワークショップは以上の三部構成であったが、実は続きもある。ここで発表しきれなかった教案は Google Drive 上に共有され、参加者はいつでもアクセスして使うことができる。また、2020年のミシガン日本語スピーチコンテストでは「Expressions-through-Poetry」という部門が追加され、高校生が自分達の「解釈」を「表現」する場が設けられている。

このようにミシガン州の K-12 及び大学の日本語教師達が「日本語教授法」を起点とする橋を無事に渡り切り、「文学」「詩」という世界へのとびらを開けられたのは、Japan Foundation Los Angeles 事務局及び、ジェフリー・アングルス教授、柳キャサリン教授、田伏素子教授のおかげである。この場をお借りして心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

(JTAM 会長・ミシガン大学 榊原芳美)